

第2回 間違えないために必要な“考え方”とは

連載コーナー「[そろそろ社会保障のこと、まじめに考えたらどうだ。。。](#)」

Web『[医療と介護 2040](#)』

2020年8月25日・9月16日

このコーナーのタイトルは、「そろそろ社会保障のこと、まじめに考えたらどうだ。。。」である。連載の2回目には、「まじめに考える」ということはどういうことなのか？について書いてみようかと思う。

なぜ人は年金に関して誤った信念を抱くのか

しばしば、次のような話をする。

日本ではもちろん、世界中で大ベストセラーとなっている『ファクトフルネス』の著者ハンス・ロスリングは公衆衛生を専門とする医師、そして、マイクロソフトのビル・ゲイツに「世界は良くなり続けている。たとえ、いつもはそんなふうに思えないとしても。…大局的な視点から世界の姿を我々に見せてくれる」と評していた『21世紀の啓蒙』の著者スティーブン・ピンカーは言語能力の獲得過程を研究してきた言語学者・心理学者、それから、『ちょっと気になる社会保障』などの著者である私（笑）は経済学者——おそれながら、彼らにはある種の共通点がある。さて、それは何？

それは、彼らの論には認知とか本能という言葉が何度もでてくることである。

私は、2004年に行われた年金改革の大騒動の頃から、いいかげんな年金論を言う論者達に、それ間違えているよっと諭^{きと}す、年金誤解を解く請負人、鬼退治をする桃太郎侍のような役回りにさせられていた。あれからもうすぐ20年近くなるのであるが、この間、どうして人は、年金に関して間違えた信念を抱くのだろうか、どうして人は、そしてメディアはトンデモ論を唱える人たちをもてはやすのだろうかと疑問を持ち続けてきた。

メディア人や学者という、人のレベルに問題があるのだろうかと思ったり、加えて、政治家にも責任の過半はあるだろうとも考えてきた。しかしながらよく考えてみると、世論が間違えるのは、何も年金だけに限られるわけではない。人というのは、歴史上、集団でも、繰り返し大きく間違えてきたのであるし、ひとりひとりでも頻繁に騙されて、時には簡単に詐欺に遭って生きていたりもする。

すくなくとも言えることは、人間は、経済学が想定する「完全情報を持って合理的に判断している生き物」という合理的経済人ではないということである。だから、塩野七生さんの『ギリシア人の物語』2巻でアテネに登場してくるデマゴグのような輩に、いとも簡単に扇動されて国の滅亡を招くのであり、そうした事態は歴史上、繰り返し起こってきた。

不安を煽るのが巧みなリーダーが年金を政争の具にしてきた

公的年金というのは、将来不安という人間の本質的恐怖が醸成する政治不安を制御する過程で生まれてきた社会制度である。それゆえに、塩野さんが次のように言う衆愚政のリーダーの資質を備えた者たちが、政治的安定の支柱となっている公的年金の破綻論を唱えないう理由はない。

民主政でも衆愚政でも、リーダーは存在する。ただし、性質は違う。

民主政のリーダー…民衆に自信を持たせることができる人

衆愚政のリーダー…民衆が心の奥底に持っている漠とした将来への不安を煽るのが
実に巧みな人

塩野七生『ギリシア人の物語Ⅱ』より

衆愚政のリーダーたちは「(将来への) 不安から発した指導者たちへの不信、その不信がエスカレートしたあげくの、自分よりは恵まれている人々に対する恨みや怒りを煽り立てるのが実に巧み¹」である。だから、年金を政争の具とすると狙いが定められてきたこの20年近く、国民の間に意識された年金不安は社会全般に広がり、実に厄介であった。

しかしその政治手法は、王位を狙うのに自らが座る玉座を壊しているようなものであり、目的を達成した後は自らが座る椅子がなくなっており、すぐにその地位を追われることになる。そのことに徐々に気づかされてきた日本の野党政治家たちは、ようやく、年金から手を引き始めてきているようでもある。そのあたりは、「[2020年年金改革は野党炎上商法の潮目になるか](#)」(2020年6月20日)『東洋経済オンライン』を参照されたい。さらには、年金に関して人が間違える理由を問うた「[人はなぜ年金に関して間違えた信念を持つのか](#)」(2019年8月21日)『東洋経済オンライン』も読んでもらいたい。

財政や社会保障は「認知バイアス」で捉えられがち

伝統的かつ主流派であった「経済学」に反旗を翻すことになった行動経済学は、経済学に

¹ 塩野七生. ギリシア人の物語Ⅱ 民主政の成熟と崩壊 (Kindle の位置 No.2681). 新潮社. Kindle 版.

おける合理的経済人の仮定に疑問を感じた人たちが始めていったのだが、彼らの研究のなかでは、人間というものはいかに間違えた判断をするのかが明らかにされていった。そしてそこでは、人間には、ものごとを認識し理解する際に本質的に過ちを犯してしまう性質があるという数々の発見がなされていった。私が、ヒューリスティック年金論と呼んだりするのは、そうした側面からの知識を用いてのことである。

「ヒューリスティック」とは行動経済学や心理学の用語で、人間が複雑な問題に直面して何らかの意思決定を行うときに、直感的にこれまでの経験に基づいて判断することである。判断が瞬時になされるので、思考する負荷は小さいけれど、その判断結果が正しいわけではなく一定のバイアス（間違い）を含んでいることが多い。

別の側面からみれば、人が判断する際には、システム1 とシステム2 があるともいう。システム1 は、直感的推論の基礎をなすもので、自動的に高速で働き、努力はほとんど必要ないが系統的なバイアス、すなわち認知バイアスをもたらす。システム2 は、複雑な計算など困難を伴う知的活動で思考に負荷がかかり努力が必要であるのに、怠け者である。

人の判断は圧倒的にシステム1 に基づいてなされている。ところが、財政や社会保障の話は、複雑でエビデンスベースの統計的判断が必要な側面が強い。たとえばヒューリスティック年金論には、まさにこの「認知バイアス」がかかっていたと考えられるのである。このバイアスは、少々負荷のかかる学習を経ないことには克服できないのだが、そのバイアスの存在にすら気づかないままの学者、研究者も山ほどいた。さらには、年金という、自分の専門外のことについて、あたかも分かっているかの如く振る舞う、オルテガの言う「近代の野蛮人」に類した話が起り得る世界でもあった²。

ここで問うてみよう。そもそも、人は、どうして認知バイアスを伴うシステム1 を備えているのか。

さてここまでくると、前回の冒頭に紹介したハンス・ロスリングやスティーブン・ピンカーたちと同じ問題意識になってくるのである。

脳の原始的な機能は現代ではバグと化す

ハンス・ロスリングは、人はなぜ間違えるのか、人はなぜ事実とは完全に異なる「ドラマチックな世界の見方」に溺れるのかという問いに対して、最初は、知識のアップデートが足

² 『ちょっと気になる社会保障 V3』における「知識補給 ヒューリスティック年金論」参照。

りないからであると考えたようである。しかしそれはどうも違うと思ひ、悪徳メディアやプロパガンダやフェイクニュースが原因ではないかと考えていくようになる。だが、そうした考えは間違いであることに気付いていく。そしてたどり着いた先は、「脳の機能」にあるというものであった。

ハンス・ロスリングよりも前に、人間の本能の問題を考えていったのが、スティーブン・ピンカーである。彼の考えは、次の一言に端的に表れているとみていいだろう。

進化がわたしたちにはめた足枷

わたしたちの認知能力、感情機能、道徳性は、あくまでも原始の環境で個々人が生存、繁殖するのに適したものであって、現代の環境で世界全体が繁栄しようとするのに適したものではない。…わたしたちが頼りにしている認知能力は、従来の伝統的社会ではうまく機能したかもしれないが、今ではもうバグだらけと思った方がいい。

スティーブン・ピンカー. 21世紀の啓蒙 上: 理性、科学、ヒューマニズム、進歩 (Kindle の位置 No. 804-810). 草思社. Kindle 版.

人間の危うい10の本能

こうしたスティーブン・ピンカーたちによる、「進化論」に基づいた社会認識は、現状肯定主義者と誤解される危なさを持っているのであるが、ハンス・ロスリングは、人間が世の中を、事実とは異なる「ドラマチックな世界」にみってしまう性向を、10の本能にまとめている。『ファクトフルネス』は、この10の本能を抑え込み、人類が、世の中を正確に理解し、その正確な理解の上に物事を判断し、ビジョンを描き、社会を改善していく必要性を訴えた本であった。

1. 分断本能
2. ネガティブ本能
3. 直線本能
4. 恐怖本能
5. 過大視本能
6. パターン化本能
7. 宿命本能
8. 単純化本能
9. 犯人捜し本能
10. 焦り本能

彼が挙げた本能は人間に認知バイアスをもたらす人間の持つ本質的性質とも言える。だ

が一見すると、新聞社の中などで、あいつはできると評価される際の基準と見間違えてしまいそうな側面もある。人がもつこれらの本能に沿って、ドラマチックな世界を求める大衆にウケるセンセーショナルな記事を量産できる記者たちが、メディアでは偉くなる。そのため、ハンス・ロスリングもスティーブン・ピンカーも（そして私も長年）、メディアがもつ本質的性質に対して手厳しい。大衆を相手とする政治の世界も同様であろう。

研究の世界では、いろいろと厳しいルールがあり、それらのルールは、人間のもつ認知バイアスを抑えるために幾世紀もかけて築き上げられてきたものであると言える。ところが、こと年金に関しては、そうしたルールをまったく知らないのか——既存研究ではどのような議論がなされているのかをサーベイ（既存の関連論文を網羅的に調査・勉強）することもなく、制度や歴史を見ることもなく、さらには公的年金が保険であるという認識にはまったく及ぶこともなく、バグを持つ本能の赴くままにトンデモ論を言う年金学者が続出したわけである。

バグと格闘するには「数えること」

「社会保障のこと、まじめに考える。。。」——“考える”という言葉は、様々な次元からなるわけだが、その中のひとつに、認知能力の持つバグとの格闘のなかで生きていくことも含まれることになる。ではどうすればいいのか。ここは、スティーブン・ピンカーに答えてもらうことにしようか。

世界の状況を正しく評価するにはどうしたらいいのだろうか。答えは「数えること」である。今生きている人が何人で、そのなかの何人が暴力の犠牲になっているのか。…定量的な考え方という、なんだか生真面目でオタクっぽい感じがするかもしれないが、これは実は道義的にも賢明な方法だといえる。なぜなら、身近な人を優先するわけでも、テレビ受けする人を特別扱いするわけでもなく、一人ひとりの価値を平等に扱う取り組みだからだ。スティーブン・ピンカー、21世紀の啓蒙 上：理性、科学、ヒューマニズム、進歩 (Kindle の位置 No. 1171-1178)。草思社。

「数える」、この言葉をみれば、『ファクトフルネス』を読んだことのある人は、まったく同じ話ではないかと思いつくことであろう。スティーブン・ピンカーは、ロスリングに触れて次のように言っている。

このように長期的な前進と短期的な後退の、あるいは歴史の流れと人間の営みのあいだでうまく折り合いをつけていこうとする前向きな姿勢のことを、ピタリと言い表す言葉がない。「楽観主義」は少し違う。物事は常に良くなると考えるのは、常に悪くなると考えるのと同じように、合理的とはいえない。…わたしのお気に入り、ハンス・ロスリングが「あ

あなたは楽観主義者ですか」と訊かれたときに使った言葉だ。「わたしは楽観主義者ではありません。とても真剣なポジビリスト（可能主義者）です」

スティーブン・ピンカー. 21世紀の啓蒙 下：理性、科学、ヒューマニズム、進歩 (Kindle の位置 No. 3313-3322). 草思社. Kindle 版.

考えるというのは、人間の本能に足を引っ張られながら、それに抗する意思と胆力をもって、将来の可能性を信じるポジビリスト（可能主義者）として生きていくのに必須な知的作業なのである。それを、このコーナー「そろそろ社会保障のこと、まじめに考えてみたらどうだ。。。｣では、みなさんに求めている。

けんじょう・よしかず

専門は社会保障・経済政策とりわけ再分配政策の政治経済学。「社会保障制度改革国民会議報告書」（2013年8月）の「医療・介護分野の改革」パートを起草した。